

# 在住ボリビア人の“絆”と社会的適応の現状

藤 本 久 司

**要旨：**三重県、愛知県、長野県3県各2市に住むボリビア人へのアンケート、インタビュー調査から、ボリビア出身者の日常的ネットワーク、交流の実情と志向を探る。特に渡日時の計画、ネットワークの活動との関わり、世界同時不況発生以来の日常的“絆”の意義、将来設計とその経験要因などを考察する。ボリビア人のネットワークは特定地域の個人の努力によって活動が継続されているが、各地のボリビア人家族が保持する同国人コミュニティとの距離は多様である。親の世代の日本語レベルは高いと言えず、移住者に対する日本社会のネガティブ面も認識しているが、渡日時の状況や母国の悲観的な現実もあり、家族全体の長期居住、永住志向は強い。日本文化、日本社会への適応についても多様な意見、態様が見られる。

## 1. 日本のボリビア人居住地域と調査の対象

2008 年末、ボリビア人の外国人登録者数は 6,527 人で、過去最も多かった。2008 年秋のリーマンショックが翌年以降、日本の雇用に悪影響を及ぼす中、やむを得ず帰国する人々もあり、2010 年末のボリビア人登録者数は全国で 5,720 人となっている。

ボリビア人登録者数は 2010 年末の外国人登録者数計 2,134,151 人の内、国籍別で見るとわずか 0.27% を占めるに過ぎない。エスニックマイノリティの中のマイノリティと言って差し支えなく、在住外国人研究の対象グループとして扱われることも比較的少ない。

人数が少ないことの結果として、ボリビア人は大半が国内の限られた地域にまとまって居住しており、三重県津市が全国で最も集住度の高い地域となっている。2010 年末でボリビア人の最も多い県は愛知県の 1,041 人、2 位が神奈川県と三重県の 1,006 人（同数）で、同国の人々の過半数（53.4%）が上位 3 県に居住している。第 4 位が静岡県の 351 人であることを考えると、3 県への明確な集住がみられ、この傾向は南米全体の日系人移住者が増え始めた 90 年代から一貫して変わらない。

また、各県の外国人登録者総数に対するボリビア人の比率でみると、神奈川県 159,405 人中の 0.63%、愛知県 204,836 人中の 0.51% に比して、三重県は 46,475 人中の 2.16% である。三重県のボリビア人比率が上位の他県に比べても突出していることがわかる。

ちなみに本稿の調査対象の 1 つ、長野県は同年末で 158 人、登録者数では 11 番目である〔表 1〕。

なぜ三重県津市を中心にボリビア人が集住しているのか、については以下のような理由が考えられる。

- i) 関西（奈良県）に生まれた日本ボリビア人協会（旧関西ボリビア人会）がボリビア人コミュニティの中心になっているが、主要メンバーが 1990 年代から三重県津市とその周辺に在住している。
- ii) ボリビア人協会の創立以来のメンバーが、津市でボリビア人を対象に生活相談、子ども

[表 1] ボリビア人の県別登録者数

順位	県名	ボリビア人数：人	外国人登録者数計：人	ボリビア人の率：%
1	愛知県	1,041	204,836	0.51
2	三重県	1,006	46,475	2.16
2	神奈川県	1,006	169,405	0.63
4	静岡県	351	86,158	0.41
5	栃木県	345	32,607	1.06
その他		1,971	1,594,670	0.12
全国計		5,720	2,134,151	0.27

の学習支援、定期的な交流イベントなどを熱心に継続的に行って来た。

- iii) 在住ボリビア人同士が多数日常的な交流の機会を作っており、津市内で定期的に週末にボリビアのダンスやスポーツの練習などを行っている。

本稿では、三重県津市・四日市市に加え、愛知県小牧市・犬山市、長野県佐久市・上田市在住の日系ボリビア人を調査対象に絞り、日系ボリビア人コミュニティの特徴を探る。住む街の違う様々な人々にアンケートとインタビューをし、日本での生活の様相、コミュニティの状況、将来的な展望などを聞きとる。同国出身でも地域の特徴があるかどうか、日本人の祖先の記憶はどうか、渡日理由や渡日時の計画、日常のボリビア人同士の交流にどのような差があるか、日本語能力や日本文化・社会への適応がどの程度、将来設計に影響しているか、その中でボリビア人相互の、いわゆる“絆”がどのように存在感を持っているのか（あるいは、持っていないのか）を探る。加えて2008年秋のリーマンショック以降の不況の中で、その絆がどの程度、仕事や再就職に作用しているのか（あるいは、いないのか）を分析する。

それらの分析の過程で、梶田他（2005）の分類する第二の非伝統的パラダイムの中の「出身地と受入れ社会にまたがる」移民ネットワークが機能しているのか、更に第三のパラダイムとして2つの社会の文脈から独立した社会空間の生まれる可能性が見られるのかどうか、といった視点も加え考察を試みる。

## 2. ボリビアの日系人の現況と歴史的概要

### (1) 日系人の概要

ボリビア日系協会連合会の資料によると、2011年現在、ボリビア国内の日系人の数は約14,000人である。その内、半数の約7,000人がアマゾン川上流地域のベニ県リベラルタ市周辺に在住する。ベニ県にはその他トリニダ市、ルレナバケ、グアヤラメルンなど日系人の多く住む街があり、県内全体では約9,100人の日系人が生活している。その他、同じくアマゾン川上流のパンド県コビハ市周辺、アンデス高原地域のラパス県ラパス市周辺、サンタクルス県（オキナワ、サンファン、サンタクルス市）などに日系人が居住している [表2]。

### (2) 移住の歴史と現況

日本人のボリビア移民は1899年、日本からのペルー移民第一陣の内91人が、天然ゴム採取やゴム工場労働者としてラパスに転住したことに始まる。1908年以降、天然ゴム景気に引か

[表 2] ボリビアの日系人数

地 域	日系人数（概数）：人
パンド県	コビハ市周辺
ベニ県	リベラルタ市周辺
	トリニダ市周辺
	ルレナバケ周辺
	グアヤラメリン周辺
ラパス県	ラパス市周辺
サンタクルス県	オキナワ移住地
	サンファン移住地
	サンタクルス市周辺
その他の地域	コチャバンバ、オルーロ他
合 計	

〔参考：ボリビア日系協会連合会資料（2011 年 9 月現在）より〕

れ、多数の日本人がアマゾン川上流地域のベニ県、パンド県に移住した。1910 年代後半にはゴム景気は衰退するが、1920 年代には、ベニ県リベラルタに 700 人弱、周辺ゴム園地区に入れると 1,500 人を超える日本人が住んでいたという説もある。これらの地域に移り住んだ早期の日本人移民は男性単身者であった。そのため現地女性と家庭を持つ者も多く、ゴム景気衰退後もその地で暮らし、日系人社会を築いていった。

第二次世界大戦後、日本政府、及び米軍占領下沖縄政庁の農地・雇用対策の一環として、日本各地から人々が農業移民でボリビアに渡った。この時代の移住先としては、サンタクルス県のサンタクルス市、サンファン、オキナワ（沖縄出身者が主であるため命名）などが知られている。いずれの地域でも相当な困難辛苦を経て入植地を発展させ、現在の日系ボリビア人コミュニティを作った。その後 1970 年代の実質的な移民の終了まで、ボリビアへの移住者は総数で約 6,600 人とされている。（以上、ボリビア日系協会連合会資料から）

なお、戦前のボリビア移民の多くが定住とともに「現地化」したといわれるのは、日本人男性の単身労働者がボリビア人女性と結婚したことが大きい。一方で戦後のボリビア農業移住者は上記のように計画的な家族移住であった。このように戦前移民と戦後移住では、入植時の状況、及び家族形態の大きな相違が見られ、ボリビア移民の特徴といえる。

### 3. 在日ボリビア人へのアンケート結果

第 1 章で述べた目的のため、アンケート調査を行った。アンケートは日本語・スペイン語を併記し、いずれかの言語で回答を得た。結果及び分析は以下のとおりである。

#### (1) 時期

2010 年 8 月～12 月

#### (2) 対象の属性

調査対象地域の選別に関しては、第 1 章で述べた経緯で、様々な人々から無作為に紹介を受

けた。家族の将来計画やコミュニティとの関係を探るという趣旨を踏まえ、子どもと同居する60歳までのボリビア人成人を主な対象にした。しかしながら、その中で10代の2人（16歳、19歳）から、自分の未来の子どもと家族を考えた場合、という前提で回答をもらったため対象に加えた〔表3〕。

渡日後の年数は、回答者の年代と相関性があるとはいえない。様々な地域、職業、年代の人を対象にアンケートを行ったため、在住期間もこのように様々なケースとなった。他の南米の国の人々の例にもれず、ボリビア人の場合も1990年代から現在まで渡日が続いている現実を反映している。2010年現在では既に滞在が10年を超える者が半数になっており、昨今の日本経済の低迷で新規渡日者が少ない状況を考えると、いずれ成人の日本在住ボリビア人は10年超の者が大多数になっていくことが十分予想される〔表4〕。

祖父母、曾祖父母が日本人という世代が多い。年代的に10、20歳代が四世の時代となっている〔表5〕。調査の対象者を世帯者としたため、10代の2人以外はすべて子どもを持つ親である。父母双方との同居が5人、父母いずれかとの同居が2人いる。

日常の言語では、25人中、スペイン語と書いた者21人、日本語と書いた者1人（犬山市、20代女性）。スペイン語、日本語の2つは2人（津市、10代男性2人）、スペイン語、日本語、ポルトガル語の3カ国語が1人（四日市市、30代男性）である。

〔表3〕

居 住 地 域	人数	男	女	16～ 19 歳	20 代	30 代	40 代	50 代
三重県津市	9	5	4	2	1	1	5	
三重県四日市市	5	2	3		1	2	1	1
愛知県小牧市・犬山市	4	1	3		1	1	2	
長野県佐久市・上田市	7	2	5		2	2	2	1
計	25	10	15	2	5	6	10	2

〔表4〕

渡日後：年数	16～19 歳	20 代	30 代	40 代	50 代	計
5 年未満		1		1		2
5～10 年未満	2	2	2	4	1	11
10 年以上		2	4	5	1	12
計	2	5	6	10	2	25

〔表5〕

日系何世か	16～19 歳	20 代	30 代	40 代	50 代	計
二世						0
三世		3	6	7	1	17
四世	2	1				3
日本国籍				1	1	2
非日系		1		2		3
計	2	5	6	10	2	25

[表 6]

日本語の会話レベル	人数：人	割合：％
1. ほとんど話せない	6	24
2. 簡単な日常会話程度	14	56
3. 少し難しい会話も OK	3	12
4. 日本人とほぼ同じ	2	8
計	25	100

[表 7]

出身地（ボリビア内）	人数：人	割合：％	備 考
リベラルタ	20	80	
トリニダ	1	4	
サンタクルス	3	12	他 2 名がリベラルタと併記
その他	1	4	グアヤラメルン、ベニ県
計	25	100	

日本語の会話レベルについての回答は表 6 のとおりとなった。4. の回答に日本の学校で少年時代を過ごした 10 代の 2 人が含まれているため、それを除くと、子どもを持つ親の回答者の全員は、上級者レベルとは言えず、ほとんど（23 人中 20 人）が、話せても簡単な日常会話程度である。つまり、シンプルな文型で構成されたやさしい日本語がわかるレベルであって、少し複雑な内容、詳細な説明などは理解できず、自身も込み入った話ができない状況であると推察できる [表 6]。

ボリビアのどの街から渡日したか、つまり出身地域についての質問では、日系人の多い 7 つの街ーリベラルタ、トリニダ、コビハ、オキナワ、サンファン、ラパス、サンタクルスーと「その他」を選択肢にした。結果はリベラルタ出身者が多数を占めた。一方、戦後移住であるサンファン、オキナワ出身者は今回の三重、愛知、長野県の調査対象者にいない。事前にも両移住地出身者が今回の対象地域に住んでいないか尋ね、また、25 人の調査対象者にも尋ねたが、サンファン、オキナワ出身のボリビア人を知っている者はいなかった。神奈川県に少数が住んでいるようだ、という回答者が複数いたが、彼らと交流はない、との話であった [表 7]。

なお、サンタクルス出身の 3 人の内 2 人は、親の世代にリベラルタから移住したと聞いた、と話した。また、トリニダ、グアヤラメルンともリベラルタと同じベニ県に属し戦前に日本人が移り住んだ街である。ランダムに調査対象を選んだにもかかわらず、ベニ県リベラルタとその周辺地域出身者が今回の対象地域に極めて多い、という結果となった。

### (3) ボリビアへの先祖の移住に関する記憶

「先祖の日本人について知っていること」を尋ねた結果、次のような個々の貴重な回答を得た。

[表 8]

- ・あまり知らない。祖父が日本人で、祖母はボリビア人である。
- ・祖父は鹿児島出身である。会ったことがないのであまり知らない。
- ・祖父母は沖縄出身である。彼らは船に乗って行き、まず祖父が、続いて祖母が移住した。
- ・私の祖父は S という名前で富山出身である。第二次世界大戦の後に日本から脱出した。私は S の兄弟の娘とは面識がある。夫の祖父は熊本出身である。
- ・私の日本人の祖父は鹿児島県出身である。
- ・祖父が日本人でボリビアに行った。
- ・母の話では、祖父は熊本出身の日本人。戦争を逃れて日本からペルーへ行き、ボリビアへ移住した。祖母はボリビア人である。
- ・祖父母は熊本出身で、戦後ブラジル経由でボリビアに移住した。
- ・日系であることは知っている。祖父は熊本出身。
- ・曾祖父が日本人で、まずペルーに移住、その後ボリビアに移り、そこで結婚した。
- ・両親は沖縄出身で、1950 年代にボリビアに移住した。
- ・祖父は福島県出身で、経済的な改善を求めてラテンアメリカに渡った。
- ・祖父は鹿児島県出身の純粋な日本人であるということだけは知っている。
- ・祖父は 1950 年代にペルー経由でリベラルタに到着した。
- ・母方の両親は沖縄県出身で、1950 年代にリベラルタに到着した。

以上の陳述は、歴史の記録と大半は合致している。1908 年から第二次大戦後まで、日本の各県から移民が続いたリベラルタとその周辺地域の記録を裏付ける証言になっている。リベラルタを含むアマゾン川上流地域では、前述のように、単身ペルー経由でゴム園の労働者として移住した日本人青年が現地のボリビア人女性と結婚したとされており、このことを証言する記述も見られる。戦後 1950 年代の移民についても複数の記述しているが、戦後は単身者だけでなく、夫婦での移住も加わり、現地に定住していったことが、回答から推測できる。いずれにしても戦前の一世代の大部分、戦後の一世または二世のかなりの割合の者が現地のボリビア人と結婚したケースが多い。そのため、三世、四世になっても日本人の血を受け継ぐ者同士の結婚が続くというケースは、ブラジルなどに比べ、少ないと思われる。ボリビア、特に、アマゾン川上流地域の日系人は、多くが現地化（混血）によって日本人的外見から乖離していったが、それぞれが曾祖父母や祖父母の言い伝えを受け継ぎ、日系人としての記憶と意識を維持してきたことがうかがえる [表 8]。

#### (4) 渡日時の状況

渡日前の職業・状況を聞いた質問には、「学生だった」との回答が約半数を占めた。ボリビアを離れ、既にかかなりの年数を経過した者が多く、30 歳代でも多数が渡日時は学生（児童生徒）であったと思われる [表 9]。

渡日の理由を聞いた回答で、仕事のため、経済的向上のため、より良い生活のため、の 3 つは現実には同じ理由と考えられる。これらが圧倒的に多いのは、低賃金や失業にあえぐ母国での現状を打開するため、妥当な理由であると言える。「勉強」と記したのは 10 代の 2 人である [表 10]。

渡日前に日本に誰がいたか、の問いには、「家族がいた」と答えたものは 6 割、親族がいた者も含めると 8 割以上であった。先に日本に定住した身内のつながりを頼っての渡日が多かったことがうかがえる [表 11]。

[表 9]

渡日前の職業	人数：人	割合：％
主婦	4	16
学生	12	48
自営業	2	8
会社員、店の従業員	4	16
教員	2	8
不明	1	4
計	25	100

[表 10]

渡日の理由	人数：人	割合・％
仕事を得るため	15	60
経済的向上のため	3	12
より良い将来のため	2	8
勉強のため	2	8
不明	3	12
計	25	100

[表 11]

渡日時に日本に家族・親戚・知人がいたか？	人数：人	割合：％
家族と親族がいた	3	12
家族がいた	12	48
親族がいた	6	24
知人がいた		0
いなかった	3	12
不明	1	4
計	25	100

\*3 人が「家族」「親族」を併記

[表 12]

渡日時の滞在予定	人数：人	割合：％
1 年程度滞在する	2	8
3 年程度滞在する	1	4
5 年程度滞在する	1	4
10 年程度滞在する	1	4
一定の年月滞在する	3	12
永住する	14	56
不明	3	12
計	25	100

渡日時の日本での定住意向を聞いた質問には、半数以上が当初から「永住」を考えていた、と答えている。また、一定期間だけの就労と滞在を予定していた者も、現実にはそれ以上の年月を日本で送っている。渡日時「短期間のデカセギ」意識の強いブラジル人と異なり、ボリビア人の場合、帰国しても展望が開けない国内事情（社会主義的財産管理政策、国全体の貧困など）が背景にあり、当初から永住を望む、あるいは、帰国を諦める、という傾向があったと考えられる〔表 12〕。

#### (5) リーマンショックの前後の状況

リーマンショックに端を発する世界的不況で雇用面で影響があった者は全体の7割である。ただ、同じ会社でも会社を一旦解雇され、数カ月経って、再雇用された者も2人いる。従って、2008年末以降、ほとんどの者が解雇されたり自宅待機を余儀なくされたりしており、就業面で直接影響を受けている。再び就業しても雇用形態が不安定になるなどの状況変化はあるが、見方を変えれば、大半が不況下でも努力して何らかの仕事を見つけ生活を維持している、と推測される数値である。一方、自分自身が失業中と明記した者が4人おり、夫が失業中と付記した者も1人いた〔表 13〕。

再就職に関して、誰から仕事を紹介されたかを聞いた結果、自分で探した者が6人（24%）おり、他のボリビア人から紹介を受けた者も5人（20%）いて、日本人やハローワークの紹介よりは割合が大きい〔表 14〕。

〔表 13〕

就業状況の変化	人数：人	割合：％	備 考
前後とも同じ会社で就業	4	16	
会社を変更して就業	8	32	
（前）無職→（後）就業	6	24	うち1人は「学生」→「就業」
（前）就業→（後）無職	4	16	
前後とも無職	2	8	うち1人は前後とも「学生」
無記入	1	4	
計	25	100	

〔表 14〕

再就職したきっかけ	人数：人	割合：％	備 考
ボリビア人からの紹介	5	20	
日本人からの紹介	1	4	
ハローワークからの紹介	1	4	
自分で探した	6	24	
同じ会社に再雇用	2	8	
無記入	7	28	無職者を含む
無職	3	12	
計	25	100	



## (6) ボリビア人ネットワークとの関わり

日常生活で比較的関わりが多い人の国籍に関する問いには、最も多い1つの国籍を挙げた者が多いが、1つに絞らず複数回答した者もあるため、計は延べ人数で51になった。結果、17人がボリビア人でやはり最も多く、次に15人が日本人を回答に入れている。ブラジル人を挙げた者も11人で、比較的多いともいえるが、居住地域の周囲のブラジル人の数の大きさに比べると、つながりが少ないとも考えられる。いずれにしても、家族によって交際が様々で、主にボリビア人同士の付き合いの深い家族が多いが、一方でボリビア人との付き合いが皆無か少ない家族もいる〔表 15〕。

ボリビア人同士の活動、交際に関して、積極的な内容の回答では、ボリビア人協会の活動参加、スポーツグループや民俗ダンスへの参加、文化の紹介イベントへの参加、交流会への参加などがある。相互に助け合うという関係を維持している、と答えたものもある。回答者の6割が何らかの形でボリビア人同士の活動に参加し、深いつながりを作っていることがうかがえる。その他、友人関係や職場での付き合いだけという人も5人おり、他のボリビア人と付き合っ

〔表 15〕

どの国籍の人と関わりが多いか	人数：人	割合：％
日本人	15	29.4
ボリビア人	17	33.3
ペルー人	7	13.7
ブラジル人	11	21.6
フィリピン人	1	2.0
計（複数回答による延べ人数）	51	100.0

〔表 16〕

傾向	日本でボリビア人同士でどのような活動、交際をしているか
Positive 15 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボリビア出身者への援助活動。</li> <li>・お互いを助け合う友好的な関係を維持。</li> <li>・ボリビア文化紹介のための祭りの開催。</li> <li>・ボリビア文化紹介のためのサポート。</li> <li>・ボリビア人協会の活動に参加。</li> <li>・ボリビアの各県の記念日を祝う集まり（習慣を忘れないための活動）。</li> <li>・働いているとき以外は可能な限り行事（特にカトリック）に参加している。</li> <li>・スポーツでの交際。</li> <li>・体育会でのキックボクシングに参加。</li> <li>・ARI というダンスグループに所属している。</li> <li>・カボラレス（民族ダンスグループ）に参加。</li> <li>・ボリビアの店へのボランティア参加。</li> <li>・パーティーや活動がある時はいつも参加し、歓談、食事をする。</li> </ul>
Medium 5 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友人関係を維持。</li> <li>・職場での関係のみ。</li> </ul>
Negative 3 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族以外の他のボリビア人との交際は無い。</li> <li>・何もしていない。</li> </ul>
2 人	（未記入）

[表 17]

傾向	自分や家族にとって在日ボリビア人のつながりはどんなことに役立っているか
Positive 13 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボリビアの文化や慣習を失わないために役立っている。</li> <li>・自国民の統合に役立っている。</li> <li>・ボリビア人協会はボリビアの人たちとスペイン語を勉強し、子どものアイデンティティを保持するのに役立っている。</li> <li>・友愛を深め、互いに助け合うような親密な生活を送るため役立つ。</li> <li>・協力や助け合いをするため役立っている。</li> <li>・日々の生活における情報交換や援助に関して役立っている。</li> <li>・日本という異国で、ボリビア人同士がいつも誰とでもつながりを持っていて、ボリビアにいたときよりお互い支え合っている。</li> <li>・他の地域のボリビアの人々と知り合い、自分たちの子どもに関する情報や経験を交換し合うことができる。</li> <li>・日本とボリビアの情勢についての意見交換に役立っている。</li> </ul>
Medium 5 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本人とは言語の問題でなかなか交際できないため、ボリビア人同士のつながりは、対人コミュニケーションを取るため役立っている。</li> <li>・ボリビアについての会話が出来る。</li> <li>・友人や知人関係（の維持・拡大）に役立っている。</li> <li>・母国から離れているため、お互いをより近しく感じる。</li> <li>・自分の国を近くに感じられる。</li> </ul>
Negative 3 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特に何も役立っていない。</li> <li>・私を含む家族は「更に日本の慣習を学んで、日本社会に順応する」と考えているため、他のボリビア人との交流は全く役に立たない。</li> </ul>
4 人	（未記入）

いないという答えた人も3人いる。いずれもボリビア人コミュニティの中で同国人同士の結びつきを強く望んでいるとは言えないが、ボリビア人全体から見れば、数値（32%）が示すように少数派といえるかもしれない [表 16]。

日本でのボリビア人同士のネットワークの意義に関する質問には、13 人が肯定的な評価をしている。自国の文化・慣習を保持するため、自分たちや子どものアイデンティティの維持のため重要であり、また、日本やボリビアの情報を交換したり、相互に助け合い支え合ったりするのに役立っている、と答えている。これらの回答者のほとんどは日頃ボリビア人コミュニティの中で積極的な交際を継続している人々である。また5人は、コミュニケーションを取るため、友人、知人としての付き合うため、という関係で、積極的とは言えないまでも、同国人をとのつながりを意識した答えとなっている。一方で少数（3人）であるが、否定的評価をしていることにも注目したい。同国人との接触を意識的に避け、日本社会への参加を望む家族もわずかず現れてきていることは、新入管法施行20年の年月の結果として、1つの事実と受け止めねばならない [表 17]。

## (7) 居住国日本の印象

表 18 は、日本に来て接した日本人に対する印象を聞いた結果である。当然ながら滞在が長くなれば日本人との関わりで様々な経験を積んでいるに違いないが、15 人が肯定的な印象を、5 人が否定的な印象を記述した。いずれも日本人が外国人から評される長所欠点が本回答にも

[表 18]

傾向	現在の日本人への印象
Positive 15 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文化的に教わるべきことをたくさん持っている。</li> <li>・確固とした目標を持っている人々である。</li> <li>・優しくて真面目で、頑張る人たち。</li> <li>・とても善良で礼儀正しい人々である。</li> <li>・たいへん教養のある人々である。</li> <li>・非常に本が好きな人々である。</li> <li>・とても気のつく優しい人々。</li> <li>・特に世界恐慌の中、(特に日本語指導に関して) 協力的で親切な人もいる。</li> </ul>
Medium 3 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国籍が異なる私たちを、前より少しありのまま受け入れつつある。</li> <li>・良い人もいれば、慣習に閉じこもった(閉鎖的な)人もいる。</li> <li>・違う世界の住民のようだ。</li> </ul>
Negative 5 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少し閉鎖的である。</li> <li>・とても閉鎖的である。</li> <li>・出入国管理局も役所も融通がきかない。</li> <li>・自分を表に出さない。内気。友人関係を結ぶのに時間がかかる。</li> <li>・人付き合いは良くなく、悪い人もいる。少し人種差別的である。</li> </ul>
2 人	(無回答)

[表 19]

傾向	現在の日本社会、日本文化への印象
Positive 9 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさんある文化の中でも日本文化はとても好きだ。</li> <li>・非常に豊かな文化である。</li> <li>・教育の高さ、尊敬の精神、規律、温厚さ、など(を感じる)。</li> <li>・素晴らしくて勉強になる。</li> <li>・すごく美しい。将来にとっていい国だ。</li> <li>・とても良い。</li> <li>・日本文化が好きだ。</li> <li>・素敵な社会であり、好きだ。</li> <li>・ボリビアとは異なりとても好ましく思っている。子どもたちのためには他のどこよりも安全な国である。息子たちに日本の文化を学んでほしい。</li> </ul>
Medium 8 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少し前まで外国人に対して閉鎖的であったことを思えば、良い社会である。</li> <li>・全てではないが、他の文化とも交流しており、少しずつ遠くの国とも接触しつつある。</li> <li>・非常に興味深い。</li> <li>・単調な生活に満ちた社会だ。文化については興味深く、どこか厳格な印象を与える。</li> <li>・発展した文化である。</li> <li>・日本が人種主義かと聞かれれば、私は違うと答える。しかし、多くの人が思っているほど人種主義でないと感じくためには、日本社会に十分同化し、日本文化に完全に順応する必要がある。</li> </ul>
Negative 4 人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文化は非常に興味深い、社会は幾分冷たいように思う。日本人は自分の周囲のものにしか関心を示さず、私のことを信用していない。</li> <li>・少し閉鎖的であるが、個人的には興味深く新鮮である。</li> <li>・閉鎖的で、他の文化に対してあまり歩み寄りががないと思う。</li> <li>・人種主義である。</li> </ul>
4 人	(無回答)

表れている。肯定的な回答では「優しい」「真面目」「礼儀正しい」という言葉が、否定的な回答では「閉鎖的」という言葉が複数にあった。印象の善し悪しの要因は、回答者本人の日本語や日本的表現の理解度、異文化に対する柔軟性なども大きいと思われるが、当回答に関する限り、日本語レベルとの相関性は認められなかった [表 18]。

表 19 は日本社会、日本文化への印象を聞いた回答である。日本人に対するイメージの設問もそうであるが、日本に住み体験から獲得した記憶が今後の個人・家族の将来計画を左右するであろう、という前提に基づく。回答では 9 人が肯定的な、4 人が否定的な印象を持っているが、内容は好悪が混じり複雑で、中間的な 8 人の意見も含め、むしろ冷静に分析しているといった感が強い。日本文化には惹かれるという者が多いが、日本社会には手厳しい意見が多い。特にボリビアのような後発途上国から来た人々は、先進国出身者が体験する以上に、日本社会で閉鎖的、排他的、人種差別的な実体験をしていることを示している。ただ、奇しくも意見の 1 つにあるように、そのように見えることが近視眼的かもしれないとすれば——1 つの可能性として、「日本社会、日本文化独特の表現スタイルに基づく誤解」も含まれているとすれば、——その理由を理解するためには社会と文化への同化、順応を経る必要がある、というのは示唆的な言葉である [表 19]。

回答者自身の日本での居住希望を聞いた回答は、永住の意思を持つ者が最も多く 11 人、「老後」「老年になる前に」「子どもの卒業後」帰国したい、という回答があわせて 12 人で、拮抗している。回答者の年齢や日本語レベルとの相関性はほとんど認められないが、永住希望者の全ては、日本人または日本社会を肯定的に、好意的に捉えている人々である。一方、日本が——人種差別的、排他的な社会で——外国出身者のアイデンティティが否定される国、という認識を持っている者の中に、永住希望者はいない。

また、永住希望者 11 人のうち 8 人は、渡日時から永住を考えていた人である。別のインタビューの回答では、ボリビアという国の政治や経済に夢を持たず、日本に移住を考え渡日した人も複数いて、多くの人々にこのような意識があるのは否めない。また一方、渡日時に永住を考えていたが、老後は（またはある程度働いて）帰国したい、と答えた者も 6 人いる。日本で生活、就労を経験し、最後は母国で送りたいと考えるに至った経緯を一樣に表すことは不可能であるし、思いに至った体験も多様であろう [表 20]。

[表 20]

日本での居住予定	人数：人	割合：%
最後まで住みたい	11	44
老後は帰国したい	5	20
老年になる前に帰国したい	5	20
その他（子どもの卒業後に帰国）	2	8
無回答	2	8
計	25	100

#### (8) 子どもへの希望

表 21 と表 22 は、いずれも子どもに対する希望を聞いた回答である。居住については、子ども自身で決めることを望む者が半数、日本で暮らすことを望む者が 4 割を占め、ボリビアで暮らすことを望む者は 2 人と少ない（1 人は複数回答）。母国居住の希望が少ないのは、国の現実への挫折感が影響していると推測できる [表 21]。

子どもの進学・学歴に対する希望では、大学まで行ってほしいと望む者が圧倒的に多い（84 %）。中学卒、高校卒でいい、という者はゼロである。移住者の子どもが日本で生きるため高い学歴が必要なことを身をもって理解している者が多い結果、と考えることができる [表 22]。

[表 21]

子どもに対する希望（将来の居住）	人数：人	割合：%
日本で暮らす方がいい	11	42.3
ボリビアで暮らす方がいい	2	7.7
子ども自身で決めるほうがいい	13	50.0
計	26	100.0

[表 22]

子どもに対する希望（学歴）	人数：人	割合：%
大学へ行ってほしい	21	84
大学まで行けなくても高校まで行ってほしい		0
高校へ行けなければ行かなくていい		0
高校へ行く必要はない		0
子ども自身で決めればよい	4	16
計	25	100

#### 4. ボリビア人とボリビア関係者へのインタビュー

以上のアンケートで得られた様々な回答に関し、状況分析の補足資料とするため、異なった立場のボリビア人、またはボリビア関係者にインタビューを行った。インタビューへの回答は、それぞれ以下のような内容である。

##### (1) Y さん（50 代ボリビア人女性、奈良市、2010 年 1 月、及び 8 月）の話

— 在住ボリビア人ネットワークのまとめ役。在住者の世話をボランティアで行う。

日本国内で、ボリビア人の多い所は神奈川など関東の一部、愛知・三重の一部、長野の一部で、地域ごとにまとまって住んでいる。三重、愛知、長野のボリビア人はベニ県、特にリベラルタ周辺の出身者が最も多く、祖先は沖縄、山口など、日本各地から来ている。

ボリビアでは農業、特に牛を飼っている人が多かった。1990 年代、日本へは土地または牛を買う目的で出稼ぎに来た。2、3 年で帰ると思って渡日した人々が多い。日本で働き、より多くのお金を貯めるため、1 年 2 年と帰国を伸ばしてきた人が多い。

リーマンショック以降、解雇があって初めて皆意識を持って日本語の学習の大事さ、地域社会での付き合いの必要性を考えている。それまでは、ボリビア人の中でスペイン語だけで生活でき、日本の

言葉、文化習慣など学びたいと思わなければ、学ぶ必要なく生活できる状態だった。

日本で日本人の友達がいることは重要だ。日本人のマナー、風習、暗黙のルールなどを知ることができる。言葉や習慣、例えば、食べ残したらダメなど、失礼にならない礼儀を学び日本で住むことが必要だと思う。日本は支援の文化であり、ある程度自分で努力した人をサポートする、という考えが基本にあると思う。

現在、ボリビア人同士、知人の知人でも、仕事をなくし住まいを失った者を一緒に住まわせ助けている者も多い。解雇後、再就職のため、ボリビア人の知人から得られる仕事の情報はハローワークより多い。ボリビア人同士、口コミで仕事を紹介している。職場は、三重県やその周辺では、パチンコ店、お弁当屋、コーヒー店、水産現場などである。ボリビア人就労者への最初の印象が良かったおかげで、ボリビア人しか雇わないという会社もある（もちろん、ブラジル人だけを信用して雇う、という会社もある）。ボリビア人協会としては三重県内で相談を受けたボリビア人のほとんどについて職場を紹介し、再就職にこぎつけることができた。

不況後の日本政府の帰国旅費援助で、帰国後3年間日本に再入国できないというのは厳しい条件で、その間、永住権（または永住権を申請できる条件の期間）が切れてしまうため、戻っていいものかどうか考えてしまう。

失業し再就職もできない者、特に子どものいる親は日本で生活できないため、やむを得ず帰国しているが、日本に残りたいというのが、大部分の人々の本音である。渡日時小さい子どもを連れてきた親もいるが、日本で子どもができた親もいる。子どもは日本しか知らない者が多く、ほとんどの子どもがボリビアより日本の方が良いと思っている。したがって、今帰国することは、子どもにとっては勉強、言葉、友達、人間関係など、何もかも中途半端になってしまう。

また、現実として、帰った家族がボリビアでできるのは農業だけで、生活するのはたいへん苦しい。技術や専門知識を取得し、それを帰国後に活かすことができる人なら生活は可能かもしれない。目的をはっきり持たず帰っても生活は成り立たないだろう。

## (2) O さん（50 代ボリビア人男性、上田市、2010 年 3 月）の話

—— 地域のボリビア人団体代表として活動。仕事の傍ら地元でスペイン語も指導。

上田市のボリビア人は、自分も含め、ほとんどリベラルタ出身で、友人の友人、親戚の親戚など、以前からお互い知っている人が多数いる。しかし、仕事が忙しい時は仲間で集まることは少なかった。2、3 年前にダンスの練習や文化紹介の相談などでよく集まるようになった。今も仕事、家庭、教育などの相談では、年3回くらい集まる。

2010 年 1 月に自分も解雇された。市内では 15% のボリビア人が国に帰った。今ここで仕事を探すのは厳しいが、子どもの教育のことを考えると日本にいたい。

10 年前、私たちは 2 人の子どもが 5 歳と 9 歳のとき日本に来た。その後 10 年経って子どもは日本語が中心になって、スペイン語をほとんど忘れた。子どものためには帰れないし、もし、子どもが帰っても言葉がわからないだろう。国では仕事や生活が困難で家庭はパニックになると想像している。

ボリビアのサンファン、オキナワ出身の日系人とは交流がない。主に神奈川県平塚市、横浜市鶴見区など関東に多くいるようだ、と聞いている。

## (3) N さん（20 代ボリビア人女性、四日市市、2010 年 10 月）の話

—— 12 年前小学生のとき家族とともに日本に移住し、今結婚し家族で住んでいる。

リベラルタ出身である。今、夫婦とも安定した仕事に就いていないが、ボリビアに帰りたくない。その理由はボリビアの左翼政権のひどい政策のためである。もし今帰ったら財産を没収される。お金を貯めたら取られる。使っていない土地は没収される。経済は良くならない。帰っても仕事もないし、将来の希望もない。また危険も多い。帰らない方がましで、安全な日本に何とかしてとどまっていた方がいい。ブラジルとは事情が違う。



日本政府の帰国助成策で帰ったボリビア人は50歳以上の人に多く、それ以外のボリビア人は国の政治状況のことを考えて日本に残った人が多いと思う。

ボリビア国内でもサンファンとオキナワはリベラルタから数千km離れているし、交通も悪いから日系人同士行き来もない。サンファンから来日している人は技術を学んで帰る人が多い、と聞いている。

(4) Mさん(70代日本人男性、東京都、元JICA職員、2010年1月、3月、6月)の話  
— 1960年代に移民送出席務も担当。作物病害専門家。1980年代にボリビア・サンファン移住地、同オキナワ移住地のJICA直営農業試験場などに勤務。

ボリビアの日系社会は、その起こりが戦前移民か戦後移住者かによって様子が異なるといえる。

戦後の移住者は、サンタクルス県のオキナワ移住地とサンファン移住地に集団で移住し、日系社会を形成した。オキナワ移住地は旧琉球政府により開設された所で、沖縄県人の移住地である。サンタクルス市の近くに位置するため、その後同市へ転住する人もおり、比較的スペイン語を話せる人が多い。オキナワ移住地は沖縄の返還に先駆けて1967年に日本政府に移管された。サンファン移住地は日本の各地出身の人々が入植した移住地である。

両移住地の子弟の結婚の多くは日本人同士であり、稀にボリビア人との婚姻関係が認められる。今も日本語は小学生からほとんど大丈夫な状態である。一方で、地元の学校はスペイン語であるため、以前はついていけない子どもも多かった。バンド県、ベニ県などの日系人とは交流が少ないと聞いている。両移住地とも入植後の約15年間は自立に困難を極めたが、その後、日本政府の支援もあって農業の大型機械化を図り、今日では大豆、稲作、養鶏を主体とする営農により、ボリビア農業の先進地として経済的に安定している。

バンド県、ベニ県、ラパス県の日系社会は、1899年ペルー移民が過酷な労働からのがれ、奥アマゾンのゴム景気に誘われて転住したのが始まりで、単身者が多く沖縄出身者もいた。当時ボリビアは日本と国交がなかった時代で、単身の移民たちはバンド県、ベニ県の現地女性と結婚し、当初から地域社会に同化した者が多くいた。定住後、日本との通信が困難であったこと、戦争中に南米諸国はアメリカ側であったことなどの理由で、日本と文化的に断絶した。このことで更に土着化(現地化)が促進された。この地の多くの日本人移民は、ゴム景気の去った1915年頃からボリビアの各都市やブラジル等に転住する者が多かったが、結婚によって現地社会に深く同化していた者はとどまり、野菜栽培や商業によって家族を支えたと言われている。現在、この地域の日系人は日本語が話せないし、宗教もカトリック教徒が多い。一世はもう生存しておらず、現在三、四世が中心で五世も生まれている。このような日系人は集住地だけでなく、アマゾン川上流域の各地に散住しているものと思われる。社会的地位の高い人も少数いるが、この地域はボリビアでも経済開発の遅れたところで全般に貧しく、日系人の多くは低所得者層に属する、といえるだろう。

その理由として以下のことがある。

ボリビアは先住民が55%を占め、この多くはアンデス高地に集住し、農業と商業によって伝統的な生活をしている。同国の主要産業は鉱業と農業で、往年のヨーロッパ支配の経緯から、スペイン人の子孫が国の経済の中心になっている。農業では、スペインその他の欧州系(13%)に属する大農場主が広大な土地を占有している。ボリビアは南米諸国の最貧国で、多くの国民は自給生活である。アメリカ型大規模農業は土地を得て農場を経営するまでに莫大なお金がかかる。ボリビアの法律では生まれた時に1人50haの土地(森林)の使用権がもらえるが、一般的にこの土地で出来ることは自給生活程度のもので、豊富な資金の無い者にとって、農業による生活向上は現実には不可能である。今のところ、日系人は努力によって中産階級の上位までは行けるが、それ以上の飛躍は困難な状況である。一般に、移住地農業では後継ぎの長男が、賃金の安いボリビア人を雇って作業を管理する。この状況の中で、二、三男の労働力は家族内で浮遊化し、さりとて都会に出て仕事が無い。日系人の中には大学卒も多いが、有利な就職口がないのが実態である。

バンド県は木材などの天然資源、ベニ県は牧畜が中心であり、これらの地域の日系人は小面積の農

地による自給生活者が多いようである。また、この地域はボリビアでも開発の遅れたところで、働き口が少ない。

1980年代後半の日本の労働環境の変化は、ボリビアの日系社会に属する人達の出稼ぎを誘発した。初めは戦後移住者の一世又は二重国籍者が中心で、1990年に日本の入管法が改正され、日系人の概ね三世まで在留資格が与えられるようになると、戦前移民の二、三世も出稼ぎ者として日本に働きに出る者が増えた。

ボリビアの日系人の中で日本への出稼ぎ者は、戦後移住地の中では農業の機械化と営農規模拡大に遅れた一世の家族、父母の国を学びながら就労による自立資金の獲得を望む二三男、独身女性などである。日本語に関しては、一世はもとより、二世も生活には困らない程度の能力を有している。この中には、日本へ出稼ぎし日本語をしっかりと学び、帰国後、貯めたお金で土地を買い、新しく農業経営を始めた者もいた。しかし、こうした成功事例は全体的に見ると少ない。

ベニ県等の戦前移民をルーツに持つ日系人は、日本との交流が断絶した社会で生活していた人々である。したがって、日本への出稼ぎは何らかの仲介勧誘によって実現したものと思える。多くは日本語を話せない日系人で、日本社会の情報も持たない人々であった。

現在、日本にいる出稼ぎの日系人は、戦前移民の子孫では三世以上、戦後移住者の子孫では二世以上である。彼らの交流会などに出席してみると、徐々に日本社会への定着が進んでいるように思われる。

## 5. ボリビア人ネットワークの活動

### (1) 日本ボリビア人協会（事務所＝奈良市）

日本ボリビア人協会の設立目的は、文化・習慣などの違いを超えボリビア人が日本社会になじんでいくこと、そのため多文化共生社会に関する事業を行うこと、である。1995年9月、「関西ボリビア人会」として発足し、2009年7月「日本ボリビア人協会」として再スタートした。

日本に住むすべてのボリビア人を対象とした生活相談、三重県津市内での日本語教室、スベ

[表 23]

日時・行事名・開催場所	内容、注釈
2010年5月2,3日 「第3回エキスポボリビア」 津市内	ボリビアの音楽や踊りを楽しみ、ボリビアの特産品を販売し、観光案内などボリビア理解のための展示を行った。同様のイベントは関西ボリビア人会の時から行っている。近隣のボリビア人を初め数百人が参加。三重県国際交流財団などが協力。
2010年7月18日 「カボラレスの日の行事」 津市内	三重県津市の公園にて開催された。ボリビア外務省の指示で、世界28カ国45カ国15000人のボリビア人が同日同時刻に同じカボラレスの踊りをした。ギネス記録への挑戦を兼ねた。政府の指示ということで参加者には賛否両論があったようである。
2010年9月12日 「ボリビアフェスティバル」 神戸市内	「海外移住と文化の交流センター」にて、ボリビアの音楽、踊り、食べ物など文化紹介イベントを行った。「関西ブラジル人コミュニティ」が共催。
2010年10月17日 「日本ボリビア人協会15周年記念パーティー」 津市内	津市内リージョンプラザに多くのボリビア人、同協会関係者、ボリビア大使館関係者が集い、協会の15周年を歌や踊りで祝った。
2011年1月15, 16日 「エキスポボリビア」 大阪市内	NHK大阪放送局アナトリウムにて、ボリビアの音楽や踊りなどの紹介イベントを行なった。



イン語の翻訳・通訳業務、国際交流事業への参加、次項に記載するイベントなどを行なっている。(以上、同協会パンフレット、及び三重県国際交流財団ホームページの同協会紹介から)

いずれも日本人にボリビア文化への理解を促し、ボリビア人相互の交流を深めるとともに、日本生まれが増加する子どもたちのためアイデンティティを維持し育てる、という目的を持っている。2010年5月から2011年1月までに日本ボリビア人協会が主催した行事は表23のとおりである。

## (2) ボリビア国際交流委員会(事務所＝長野県上田市)

長野県上田市とその周辺に住むボリビア人が集まり、地域を中心に多文化共生のための交流活動促進を目的として、2009年9月に結成した。具体的活動としては、上田市周辺の日本語ボランティア教室に関する情報提供、上田市国際交流協会主催の「ボリビアデイ」の企画参加、上田市や佐久市の国際交流フェスティバルへの料理や音楽、ダンスでの参加など、居住地域を中心に活動を続けている。

また、こうした機会に備え、日頃からボリビアの音楽やダンスの練習を続けており、毎回、近隣に住むボリビア人2、30人が集まっている。定期的に集まることが、練習だけでなく、日本や母国の情報交換、同国人同士の結びつきの維持・強化、アイデンティティの再認識、子どもたちへの文化継承など、様々な有意義な効果をもたらしている。

## 6. 調査対象地域のボリビア人コミュニティの特徴分析

前章までの結果を踏まえ、今回の対象地域でのボリビア人コミュニティの現状と特徴に関する分析と課題を以下に述べる。

(1) 今回アンケートまたはインタビューした3県の日系ボリビア人は、戦前、及び終戦後間もない1950年代までの移民の子孫でベニ県リベラルタ出身者が多い。

ボリビア国内の日系人の多様性により、ボリビア国内でも日本国内でもパンド県・ベニ県出身者と、ラパス市周辺出身者・サンファン出身者・オキナワ出身者間の民間交流はほとんど無く、知人や親戚もいないという証言が多い。特に、戦前移民日系人と戦後移住日系人の交流は、母国でもほとんど無く、日本在住者間でも無い、との証言が多い。国本(2000)は、同じ戦前移住者でも、アマゾン川源流地帯の混血日系社会を築いたグループと、ラパス中心に商業に従事したグループは、移住100周年企画の具体化までほとんど関わりを持っていなかったこと、一方で戦後移住者とラパス地域の日系人の間には緊密な交流があったことを記している。

なお、梶田他(2005)によると「コロニア・オキナワからのデカセギは、1981年に二世の若者が渡日し、栃木県にあるホンダの下請け工場で働いたことから始まり、その後知り合いを呼び寄せ、「一時はコロニア出身者が150人も同じ工場で働いていた」とある。戦後移住者の子孫は関東方面に居住しているのではないか、という今回のインタビューでの話と合致し、現状については、今後の研究対象としたい。

(2) 戦前移民は、日本人男性がボリビア現地の女性と結婚したケースが多いため、「現地化」「ボリビア化」という言葉で表されるように、いち早くボリビア社会に適応した。「当時も今もボリビアの人口の半数はインディヘナ(ケチュア族、アイマラ族)であり、次いでメスティ

ソと呼ばれるインディヘナと白人との混血が続く」（吉田忠雄、2006）という記述から、ここでいう現地の女性とは、ケチュア族またはアイマラ族であったと推定される。こうしてボリビアのアマゾン川上流域では、戦後間もない時期の移住者も加わり、いずれにしても現地の人との結婚を経て日系人は現在、三、四世の世代となっている。こうした経緯から、日系人であっても容貌が日本人と異なる人々が多い。ヨーロッパ系白人の先住民がもともと多かったチリやアルゼンチンの日系人とは状況が異なり、また、日系人同士の結婚も多く日本的容貌の人が今も多く見られるブラジルの日系三、四世の状況とも異なる。

(3) 曾祖父や祖父が日本人という場合でも、「日系人」という意識や記憶は家族の中で根強く残っている。日系人アイデンティティが保持されている要因として、出身地のボリビア各地域に「日本人会」がいち早く設立され、戦後は「日系人協会」として再建され、様々なイベントを通じて日本文化を紹介し、先祖が日本人であったことを再認識させていることも大きい。更に背景には、ボリビア国内での共通の民族イメージとして、先祖が日本人であることによるプライオリティの存在がある、と考えられる。

(4) 一般に、ボリビア人団体が存在しリーダーがいて熱心に活動をしている地域ではネットワークに関わる機会が多い、ということが回答から見てとれる。また、そのような地域では経済情勢による失業、再雇用に際し、同国人同士のつながり、つまり“絆”が重要な役割を果たしている。

(5) “地域社会の中の多様性の一つとしてのボリビア人”であることに加え、日本社会・文化への適応面でも、ボリビア人の中の多様性が現れている。言いかえれば、母文化と日本文化間での距離感の相違による「内なる多文化性」を含んでいる。

今回の回答者の中でもボリビア人同士の日ごろの“絆”を重視し、ボリビア人としてのアイデンティティを維持することを自然に考える人々が多い一方、日本社会・日本文化への適応を重視し、ボリビア人ネットワークを意識的に避ける、いわゆる「同化型」という人々も一定数存在する。ただ、後者のような家族でも親の日本語レベルが高いといえるわけではなさそうだ、という課題が残る。

ボリビア人ネットワークに関わる深さ、頻度、動機などは個人、家族ごとに多様な形態がみられる。同じリベラルタ出身ボリビア人の中でも多様である。ネットワークを自然に受け入れている人の中にも積極的に関わろうとする者、必要なとき（母国の情報がほしいとき、母国関連イベントがあるとき、同国者でなければ解決しない問題が起きたとき、など）関わる者、自分から関わることはない者など、様々である。積極的に関わる中にも、日本社会との交流を最小限にし自文化に執着するゆえにネットワークを重視する者（分離型）もいれば、ネットワークに関わり日本人との交流も積極的に行おうとする者（統合型）もいる。この他、自文化の保持意識も弱くホスト社会でも受け入れられないと感じている者（周辺型）も存在すると思われるが、今回の調査では対面していない。

(6) 多くがボリビア人としてのアイデンティティや誇りを維持しているが、母国ボリビアの現状には冷めた視線を共有している。したがって、現在の日本での仕事や生活が不安定でも、可能な限り日本に残る努力が続けられている。その過程で個人的にネットワークが重視され、ネットワークの意義が深化している。しかし一方で、そのネットワークはごく限られた中心的な個人の努力によって維持されている面も大きい。まだ、日本全体でボリビア人の社会資本としての組織化は弱く、「組織の維持＝個人の努力」という面がこのまま変革されない場

合、中心となっている個人の消滅（帰国、転居、高齢化、死亡など）によって、ネットワーク維持も難しくなるという危機は、常に存在する。

- (7) 日本社会で移住者として暮らす長短両面を経験的に認識しながらも、永住への志向性は高い。アンケート、インタビューの回答に見られるように、出身地域での経済的困難、母国の政治経済の低迷など、帰国するにはネガティブな複数の条件を抱えていることから、日本での長期居住、永住を望む者の割合は、ブラジル出身者などに比べ高いことが推定される。
- (8) 日本で生きるために少なくとも高校進学が必要なことを情報として知っているが、親自身では日本の学校の教科をフォローできないため、自習学校や塾、ボランティア教室などに行かせるケースが多い。子どもへの期待は大きく、日本で大学進学することを望む親がほとんどである。結果的に行けるかどうかは別にして、ブラジル人の親に比べ、より高い割合の親が子どもの教育に力を入れている姿が現実として見られる。

## 7. 終わりに

今回、在住ボリビア人の調査をするきっかけとなったのは、三重県津市で筆者が大学生・市民有志と 2005 年から関わっている、土曜日の外国籍児童生徒学習支援ボランティア活動である。入れ替わりはあるが毎回 10 人弱の外国籍中学生の高校進学希望者が、授業でわからないところや宿題を持って来、それをスタッフが教えている。開始以来、津市内で一番多いはずのブラジル人の子どもより、ボリビア人の子どもたちが常に半数以上を占めていることは特筆すべきことである。その背景に「日本ボリビア人協会」を主にした親同士の連携と教育意識の高さがあり、代表の Y 氏の親族や中核の人々が津市やその周辺に住み、大きな絆づくりの中心となっていることを知った。また、このように組織網の中で情報を得、交換する者がいる一方、ネットワークとは無関係に日本で生活の安定を目指して、日本人や地域社会との交際を重視しているボリビア人もいることも知り、各地域で個別の接触を図った。

浮かび上がってきたのは、アマゾン川上流域の街、リベラルタを中心にした地域出身者のネットワークである。渡日までは相互に知らない間柄だった者同士でも、日本で知り合い交流を深めている者も多く、同郷の日系人というアイデンティティの一致が、異郷での結びつきを促進する役割を担っている。また、家族ごとに多様な価値観や人生設計を持っていて、日本社会・日本文化の長所を賞賛しつつも自分たちが住む場として日本社会の不確実性を認識している者も多い。更に、ボリビアの国情ゆえに、このまま日本にいたいことを願っている人々が多いことは推察していたが、本調査により確認することができた。今回浮かび上がったボリビアの人々の特徴と多様性は、今後日本国内で様々な変容を遂げながら、ブラジル人やペルー人とはある種異なった軌跡を描いて行くのかもしれない。

なお、この調査は 2010 年末までに行ったため、2011 年 3 月の東日本大震災以降の動向については触れることができないが、今後の追跡調査として研究対象にしたい。また、日系ボリビア人の中で、アマゾン川上流地域以外の出身者、戦後開拓移住地出身者の日本での現状についても調査できる機会を早期に持ちたいと願っている。

## 引用文献

- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人、『顔の见えない定住化～日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』、名古屋大学出版会、2005、pp.16-17、209  
吉田忠雄、『南米日系移民の軌跡』、人間の科学社、2006、pp.281

## 参考文献

- 国本伊代、「アンデスからアマゾンへー日本人ボリビア移住小史」、『ボリビアに生きる』第三部第1章、ボリビア日本人移住100周年移住史編纂委員会、ボリビア日系協会連合会、2000  
日本ボリビア人協会、「日本ボリビア人協会（パンフレット）」  
矢野パトリシア、「文化変容オリエンテーションと心理・社会文化的適応」村井忠政編、『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生ーグローバル時代の日系人』第14章、明石書店、2007  
山西優二、「多文化共生とは～対立、緊張、そして新たな関係づくりへ～」、『多言語・多文化ブックレット』No.6（文化間対立の超克を目指して）、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター、2007

愛知県地域振興部国際課、“愛知県内の外国人登録者数の状況”

<http://www.pref.aichi.jp/0000037461.html> 2011年2月25日公表

法務省統計局、独立行政法人統計センター、“登録外国人統計統計表 2010年”

[http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?\\_toGL08020103\\_&listID=000001074828&requestSender=dsearch](http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_toGL08020103_&listID=000001074828&requestSender=dsearch) 2011年8月19日公表

ボリビア日系協会連合会、“ボリビア日系社会の歴史と概況”、（2011年9月25日検索）

[http://www.fenaboja.com/fenaboja\\_hp/fenaboja.html](http://www.fenaboja.com/fenaboja_hp/fenaboja.html)

和歌山市民図書館移民資料室、“各国移民史：ボリビア”（2011年9月25日検索）

[http://www.lib.city.wakayama.wakayama.jp/wkclib\\_doc/imin/imin-top.htm](http://www.lib.city.wakayama.wakayama.jp/wkclib_doc/imin/imin-top.htm)



エキスポボリビア（2010年5月3日）  
[上・右とも]

